

現代中国語の方位詞“上”、“里”について 空間を表す名詞を中心に

寺澤 知美

1. はじめに

方位詞とは、方向や相対的な位置関係を表す語であり、その語構成上の特徴に基づき“上、下、前、后、里、外……”などの単純方位詞と、これらの単純方位詞に“～边、～面、～头”などの接尾辞を加えた合成方位詞の二種類に分けられる。朱徳熙(1982)ほかでも広く言及されているように、“上”と“里”は、方位詞の中でも特に活発な結合能力を有しており、使用頻度の高い方位詞である。方位詞“上”、“里”の基本的な用法としては、“上”は“桌子上”のように対象が二次元的な面としてとらえられる場合、“里”は“房间里”のように三次元的空間としてとらえられる場合にそれぞれ用いられるというように、一見明確な違いがあるように思われる。しかし、一方で両者の用法には非常に近い部分もあり、その使い分け及び微妙なニュアンスの違いは、中国語学習者にとって理解が難しい。例えば、以下の例(1a)～(2b)のように、“操场”と“公园”の場合、“上”、“里”の使用状況には違いがみられる。

(1a) 他们在操场上散步。[彼らはグラウンドを散歩している。]

(1b) 他们在操场里散步。[同上]

(2a) *他们在公园上散步¹。

(2b) 他们在公园里散步。[彼らは公園を散歩している。]

例(1a)～(2b)から明らかのように、“操场”の場合は“上”だけでなく“里”も用いられるが、“公园”の場合には基本的に“里”のみが用いられ、“上”は用いられない。これは、どのような理由によるものなのか。また、例(1b) (2b)のように、方位詞“里”は“操场”、“公园”のいずれの場合においても用いられているが、この二つの“里”は同じ用法であるのか。本稿では、空間を表す名詞に後置する方位詞“上”と“里”の選択に影響を及ぼす様々な要素のうち、主に名詞に対する空間認知という観点から、両者の使い分けについて考察する。

2. 「範囲」としての“里”

例えば“广场”の場合、その顕著な二次元的特徴から“上”との共起が一般的である。

(3) 我问他干吗去了，他说在广场上看了会儿人家放风筝。

(王朔《浮出海面》)

[私が彼に何しに行ったのかを聞くと、彼は広場でみんなが凧を揚げるのをしばらく見ていたと言った。]

保坂・郭(2000:241)は、“广场”について“里”が用いられない理由として、「ある場所を“广场”と認知するにはその特性として、二次元の場所と意識されなければならない」、「三次元の空間と意識されるなら、もはや“广场”とは認められない」としている。しかし、“广场”についても“里”の用いられる例はみられる²。

(4).....,穿着崭新节日盛装的牧民们的衣服湿透了,但是,任它风吹雨淋,

广场里的观众一动不动!

(人民日报 1995)

[真新しい晴れ着姿の牧畜民たちの服はすっかり濡れていたが、風にふかれ、雨に濡れるに任せ、広場の観衆は微動だにしない。]

例(4)における“里”の用法は、高橋(1992)の分析によれば“表示框框内”[枠内を表す]という用法に該当すると考えられる。したがって、この場合の“广场”についても、“广场”という一つの枠、すなわち、一定の境界を有する一つの「範囲」として認識されていると考えられる。この場合の“里”は、“广场”という特定の「範囲」(境界)の内側か外側かという関係、すなわち“外”との対立を表し、基本的に対象の空間の広がりを規定する次元とは無関係である。したがって、“里”は“房间”のように対象が典型的な三次元的特徴を有する場合についてのみ用いられるわけではなく、話者によって「範囲」として認識される場合については、たとえ二次元的特徴が顕著であってもその使用が認められることになる。また、このような“里”の用法は、三次元の空間を表す“里”の用法とは区別される。つまり、方位詞“里”は、次元の特徴に着目した場合、立体(三次元)的か、平面(二次元)的かという対立関係を“上”との使い分けによって表し(この場合の“里”を“里₁”とする)、一方で、“外”との使い分けにより、境界を基準とする内外関係についても表している(この場合の“里”を“里₂”とする)ことになる。以上の関係をまとめると次の【表1】のようになる。

【表 1】

	“上”	“里”	“外”
<次元>	平面	立体 (“里 ₁ ”)	
<境界>		内側 (“里 ₂ ”)	外側

前述のように、内外関係を表す“里₂”については、基本的に対象の次元とは無関係であることから、例えば“广场”のように、“上”との共起が一般的である二次元的特徴の顕著な名詞についても、ある範囲の内側であることを表す場合には共起が可能となる。すなわち、理論的には、二次元的特徴の顕著な名詞であっても、範囲を特定するための明確な境界が存在する場合、常に“里”との共起の可能性があることになる³。しかし、理論的には可能であっても、実際に全ての名詞が“里”と共起するわけではない。以下、方位詞“里”との共起制限について、名詞に対する空間認知に関わるものを中心にみていく⁴。

3. 形状による共起制限

“沙漠”と“沙滩”は、いずれも「砂」という同様の成分から構成される二次元的特徴の顕著な名詞であるが、方位詞“上”、“里”との共起状況は必ずしも一致しない。まず、“沙漠”については、例(5)のように“里₂”と共起する場合、例(6)のように“上”と共起する場合のいずれの例もよくみられる(例文末尾の括弧内に“上”、“里”の置き換えの可否を示す)。

(5) 沙漠里没有树, 一棵都没有。(沙漠上) (鲍昌《苕苕草》)

[沙漠には木がない。一本もない。]

(6) 上车以后把师傅杀死, 甩在沙漠上, 自己把车开回了上海。(沙漠里)

(毕淑敏《翻浆(上)》)

[車に乗った後親方を殺して、沙漠に置き去りにし、自分で車を運転して上海に戻った。]

一方“沙滩”の場合、以下の例(7)、(8)のように、基本的に“上”とのみ共起し、“里₂”とは共起しにくい。

(7) 她独自坐在沙滩上, 头发、衣服都湿透了, 贴在身上。(*沙滩里)

(王朔《一半是火焰, 一半是海水》)

[彼女はひとり砂浜に座っていた。髪の毛も服もすっかり濡れて、体に貼り付いていた。]

(8) 下午，他们便相邀去洗海水澡，在沙滩上散步。(*沙滩里)

(作家文摘 1997)

[午後、彼らはお互いに誘い合って海水浴に行き、砂浜を散歩した。]

但し、次のような例外もみられる。

(9) 暗里，二百多男女老少，挨家挨户被敌人抓起来，用刺刀赶到村前的沙滩里，突然，一片大火从村里升起。(沙滩上) (人民日报 1995)

[秘密裏に二百名あまりの老若男女が軒並み敵に捕まり、銃剣で村の前の砂浜まで追い立てられると、突然村に火の手が上がった。]

例(9)の“沙滩”は“里₂”と共起しているが、例(7)、(8)とは異なり“沙滩”は単独では用いられておらず、“村前的”の修飾を受けている。そもそも“里₂”との共起は、対象が一つの「範囲」として認識されることが前提となっている。つまり、“沙滩”は単独では“里₂”と共起しにくい、一方で、例えば例(9)の“沙滩”のように単独で用いるのではなく、何らかの要素を加えることによって(この場合“村前的”による修飾)、一つの「範囲」としての認識が可能となれば、“里₂”との共起も可能となると考えられる。以上のようなことから、“沙滩”は基本的に一つの「範囲」として認識されにくい傾向がある⁵といえるが、これに対して“沙漠”の場合、例(5)などにみられるように、単独で“里₂”と共起することが可能であることから、一つの「範囲」として認識されやすい傾向があり、“沙滩”の場合に対する認識とは異なるものであると考えられる。

このような認識の違いが生じる原因の一つとして、“沙漠”と“沙滩”の形状の違いが挙げられる。つまり“沙滩”の場合、“沙漠”とは異なり、一般に海に沿った細長い形をしていることから、一種の「線・带状」としてとらえられるため、“上”との結びつきが強くなるのではないかと仮説が立てられる。

例えば、「線・带状」の形状的特徴を持つ名詞の一つに、“马路”、“公路”などの「道」類の名詞が挙げられる。

(10) 马路上除了排着队走的巡警，差不多没有什么行人。(*马路里)

(老舍《赵子曰》)

[大通りには、隊列をなして歩いている警官以外ほとんど通行人はなかった。]

(11) 敌人的坦克，在公路上往南跑！(*公路里)

(老舍《无名高地有了名》)

[敵の戦車は、道路を南へ逃げていった。]

例(10)、(11)のように“马路”、“公路”の場合には“上”が用いられ、ここでの“上”は“里”に置き換えることができない。

また“公園”の場合、例(2)でもみたように、“里”との共起が一般的である。しかし、次のような場合には、“上”を用いることも可能である。

(12)长达 10 公里的西海岸带状公园上 ,一个主会场和 9 个分会场活动以海、陆、空三种形式全方位展开 , (公园里)

(《人民日报·华南新闻》2002 年 12 月 02 日第三版)

[長さ 10 キロに及ぶ西海岸の带状の公園において、一つの主会場と九つの分会场での活動は、海、陸、空の三つの方面にわたって展開されており...]

この場合の“公園”は、「带状」であるという条件が付加されることによって“上”との共起が可能となっていると考えられる。このようなことから「線・带状」という形状が方位詞の選択にある一定の影響を与えるものであるといえる。

4. 閉鎖性

前述のように“操场”については、その二次元的イメージから“上”と共起しやすい傾向があるが、一方で、一つの「範囲」としてとらえた場合には、“里”を用いることも可能である。しかし、“公園”の場合、基本的に“上”との共起は認められない⁶。すなわち、“操场”のように平面(二次元)的特徴を有する名詞については、次元と関係のない“里₂”との共起が可能となるが、一方で、もともと三次元的特徴を有する名詞については、“里₂”の用法として用いられる前に、“上”の用法と対立する“里₁”の性質を有していることとなり、基本的に“上”に置き換えることはできない⁷。しかし、例(2b)“他们在公园里散步。”において、“里”を“上”に置き換えることができないのは、“公園”が三次元的特徴を有するためであろうか。保坂・郭(2000:241)は、“公園”が“里”とのみ共起することについて以下のように述べている。

“公園”という場所の特性として必ず塀や柵、門などがあって、そこは囲われた三次元の空間と意識されることが挙げられる。ここでの“~里”のはたらきは三次元としてのマークであるだけでなく、ある境界の“里”(なか)と“外”(そと)をマークするものでもある。

“公園”に対する認識のポイントは、保坂・郭（2000）の指摘するように、「囲われた空間」を表すことにあると考えられる。「“公園” = 三次元的空間」という図式は、少なくとも筆者個人の「公園」に対する認識とは相容れないものであるが、一方で、周囲を常に塀や柵で囲われた空間、すなわち明確な境界が存在する空間であるという条件が、一つの「範囲」としての認識と結びつきやすくするものであることは容易に推測される。この場合の“公園里”に近い例として、“学校里”が挙げられるが、刘宁生（1994：175）は、英語の“at the school”、“on the campus”と中国語の“学校里”の表現の間に存在する相違について、塀の有無が関連していることを指摘している。すなわち、中国語における“学校”が周囲を塀で囲まれていることから内部空間を有する物体としてみなされるのに対して、英語社会における“school”、“campus”がそれぞれ平面の一点、平面としてみなされるのは、伝統的に学校というものが塀などで囲まれておらず、学校が地面全体の一部分として認識されるためではないかというものである。“学校”の場合、校舎などのイメージから、“公園”に比べて三次元的イメージに結びつきやすいようにも思われるが、学校の敷地内に具体的に何があるのかというのは、二次的な要素にすぎない。重要なのは、塀などに囲まれた空間であるという共通認識が成り立っている場合、たとえ二次元的特徴を有していたとしても、閉鎖された空間としての認識の方が優位にたつという点である。したがって、閉鎖された空間の代表ともいえる“房间”のような場合について“里”が用いられるように、“公園”、“学校”の場合についても、その高い閉鎖性から“里”との強固な結びつきがあると考えられる。

また、このような閉鎖的イメージが“里”と結びつく例は、このほかにもみられる。先に「線・带状」の形状的特徴を持つ名詞として、“上”との共起が一般的な“马路”、“公路”の例を挙げたが、「道」類の名詞全てにおいて“上”との共起が一般的であるというわけではない。

(13) 胡同里没有行人，没有动静，她独自立了一会儿，慢慢的走回屋中去。

(*胡同上) (老舍《四世同堂》)

[路地は人通りがなく、物音もしなかった。彼女はしばらくひとりたたずむと、ゆっくりと部屋に帰った。]

(14) 石队长把老郑从巷子里推出来。(*巷子上) (老舍《火葬》)

[石隊長は老鄭を路地から押し出した。]

“胡同”、“巷子”は、通常の「道」としての「線・带状」という形状的特徴のほかに、「両側に建物が並んでいる」という特徴がある。したがって、道の両側に建物が並んでいるという環境が、一種の閉鎖感を生じさせることから“里”が用いられると考えられる。このように、“里₁”が用いられる条件としては、必ずしも典型的な三次元的空間だけでなく、閉鎖性の高さという基準についても重要なファクターとなっているといえよう。

5. ニュアンスの違いについて

ここまで、方位詞“里”、“上”の使用状況についてみてきたが、最後に両者の置き換えの可能な場合におけるニュアンスの違いについてみる。

(15) 总之，每当我躺在酥软、厚密、繁茂的草地里，总有一种说不出的快感。(草地上) (宋学武《干草》)

[とにかく、軟らかく厚く生い茂った草地に横たわると、いつもなんとも言えない心地よさを感じていたのである。]

例(15)の場合、“酥软”、“厚密”、“繁茂”などの修飾語によって、“草地”がふさふさとした軟らかいものであることが表現されているが、この場合、これらの修飾語だけでなく、“草地”に後置された方位詞“里”についても聞き手に与えるニュアンスに影響を及ぼしていると考えられる⁸。このような認識は、高桥(1992)が指摘する“沙发”についての認識と近いものであるといえる。

(16) 他坐在沙发上⁹。(高桥(1992))

[彼はソファーに座っている。]

例(16)は、“上”を“里”に置き換えることが可能である。この場合、ソファの“上面、表面”に座るというイメージと、やわらかいソファーに沈み込むイメージの二種類からなると考えられる。このような認識が例(15)の“草地里”においても共有されると考えられる。また、例(16)同様、例(15)についても、“里”だけでなく、“上”も用いることができる。すなわち、“上”を用いた場合には、対象の有する特徴のうち二次元的特徴について注目されるが、一方で“里”を用いた場合には、三次元的イメージと結びつくという違いがあることから、両者を使い分けることによって、話者の空間認識の違いを表現することが可能となる。

また、このほかにも、視点の違いによってニュアンスの違いが生じる場合もある。葛婷(2004: 67)は“视角转换选择”について次のような指摘をしてい

る。

在这类三维空间中“上、里”变换使用，是视角选择的结果，这根本上仍然是由于“上、里”的显著差异造成的。当说话人说到“里”时，自然要离开一段距离，跳出来从外部才会看到一个封闭的空间；而“上”处于底面上，只有进入一个三维空间，才能观察到底面上发生的一切。

したがって、葛婷（2004：67）の見方に従えば、話者が“里”を用いる場合には、対象との間に一定の距離があり、“上”を用いた場合には、話者の視点は対象に包括されることになる。このような違いは、表現されるイメージにどのような影響を与えるのだろうか。以下、それぞれ“里”と“上”の用いられた二つの例を比較してみる。

（17）记得我呆住了，双手垂下，在草地里静静地站着，一直等到那歌声在风中消逝。（张承志《黑骏马》）

[私は茫然として、両手を垂れ、静かに草地に立つくし、あの歌声が聞こえなくなるのをずっと待っていたことを覚えている。]

（18）他听见有动物的呼吸声，便急忙抬头，不看还好，一看吓了一跳，离自己不足十米的草地上站着一只狼，浑身雪白，只是胸前挂着一块翡翠玉佩，似乎还发着光。（小说阅读网 灵冥言《雪狼恩》）

[彼は動物の呼吸音が聞こえると、急いで頭を上げた。見なければよかったが、見てしまって驚いた。自分から10メートルと離れていない草地に一匹の狼が立っていた。全身雪のように真っ白で、ただ胸にヒスイの玉の装身具をつけており、まるで光を発しているようだった。]

まず、例（17）の場合、“我”が“草地”に立っている状況の描写であるが、葛婷（2004：67）の見方に従えば、“草地上”ではなく“草地里”が用いられていることから、筆者の視点は“我”から離れていると考えられる。すなわち、離れたところから“我”を観察し、それを描写しているわけであるが、この場合、距離的に離れたところからの観察というだけでなく、現在の“我”から当時の“我”という時間的な隔たりについても表現される可能性もある。一方で、例（18）の場合は、“草地上”を用いることによって、筆者の視点は登場人物の“他”と一体化され、そこから10メートルも離れていないところにいる狼について描写している。このような“上”の用法には、全体を俯瞰的に観察する“里”に表れる距離感とは異なり、ある種の臨場感を読み手に感じさせる働きがあると

いえる。つまり、“里”を用いた場合の第三者的な客観的描写に対し、“上”の場合には、筆者の視点のみでなく、筆者を通して読み手までもが登場人物と一体化することから、描写内容がより直観的に読み手に伝わると考えられる。

また、“上”によって表される臨場感は、例(18)のように、筆者の視点が登場人物と一体化する場合だけでなく、次の例(19)のように、登場人物の視点を借りない場合についても、同様の作用がみられる。

(19) 操场上静得能听见心房的跳动。 (人民日报 1995)

[グラウンドは心臓の鼓動が聞こえるくらいに静かである。]

例(19)の場合、心臓の鼓動が聞こえるくらい静かな様子を描写しており、“上”を用いることでシーンと静まり返ったグラウンドの情景が臨場感を伴って伝わってくる。以上のようなことから、“里”と“上”を使い分けることで、視点の違いを明確にし、特定のニュアンスの違いを表現することも可能であるといえよう。

6. まとめ

本稿では、名詞に対する空間認知が方位詞“上”、“里”の選択、及びそれによって表されるニュアンスの違いに与える影響について考察した。その結果、方位詞“上”、“里”と共起する名詞の間には以下のような傾向がみられることが明らかとなった。まず、「平面的空間」を表す場合、すなわち、二次元的特徴を有するものについては、基本的に“上”との共起が可能であるが、一方で、二次元的特徴の顕著な名詞であっても、ある「範囲」の内側として認識される場合については、“里”(“外”との対立関係にある“里”)も用いられる。但し、「線・帯状」の形状的特徴を有するもの(例：马路、公路、沙滩)については、例外的に“里”との共起が制限される傾向がある。一方、「平面的空間」に対する「立体的空間」の場合には、基本的に“里”が用いられるが、“房间”のように典型的な三次元的空間だけでなく、“公园”、“学校”などの「閉鎖的空間」を表す場合についても同様に“里”が用いられる。また、「閉鎖的空間」については、一種の「平面的空間」として認識される可能性も皆無ではないように思われるが、実際には、例(2a)“*他们在公园上散步。”が非文となるように、中国語における“公园”については、塀などによって完全に閉鎖された空間であるという共通認識が確立しており、このことが“里”との強固な結びつきに影響しているといえる。

本稿は、2007年1月名古屋大学大学院国際言語文化研究科に提出した修士論文の一部に加筆修正を施したものである。

注

- 1 例文の文頭に付した「*」は、その表現が非文法的であることを表す。
- 2 “广场”が方位詞“里”と共起する場合、例(4)のような範囲を表す“里”だけでなく、三次元的空間を表す“里”として用いられている例もみられる。
 尤其让人不能容忍的是，他们什么都不买，而且也不在美食广场里用餐。他们每天都吃自己带的午饭！(??美食广场上) (新华网 12月2日)
 [特に我慢ならないのは、彼らが何も買わず、しかも“美食广场”で食事もしないことである。彼らは毎日自分で持ってきたお昼ご飯を食べているのだ。]
- ここで“美食广场”は、例(3)における“广场”のような典型的な(屋外にあり、屋根や壁などがない)“广场”とは異なる空間を表す。この場合の“美食广场”とは、ある商業施設の飲食コーナーを指し、建物の中に存在する場所、すなわち三次元的空間として認識される場所である。このような“广场”の用法は、“广场”の派生的用法であるといえる。
- 3 例えば、“广场”について、具体的にどのような場合において「範囲」として認識されるのか、すなわち、どのような場合において範囲としての“里”が使用されるのかについては、個人差もみられる。“广场”の場合、基本的には“上”との共起が一般的であるが、例えば例(3)のような場合についても、“广场上”を“广场里”に置き換えることが可能であるとするインフォーマントもみられる。しかし、例(3)について“广场里”とした場合に違和感を覚えるとするインフォーマントについても、例(4)については成立することを認めていることから、例(3)と(4)の間に“里”との共起制限に関わる何らかのヒントがあると考えられる。こうした点については、今後の課題としたい。
- 4 方位詞“里”、“上”と前置される名詞との共起制限については、共起する動詞や補語、介詞、或いは文脈による制限などの様々な要素の影響を受けるが、本稿では、主にこれらの方位詞に前置される名詞に対する空間認知に関わるものについてのみを考察対象とする。
- 5 もっとも、「範囲」としてではなく、砂浜の砂の中を表す場合には、“沙滩里”が用いられる。
 0 - 50 , 日温差更大, 夏天午间地面温度可达 60 以上, 若在沙滩里埋一个鸡蛋, 不久便可食用。 (《中国儿童百科全书》)
 [0 - 50 、一日の温度差は更に大きく、夏の正午の地温は 60 以上に達し、もし砂漠に卵を一つ埋めれば、ほどなく食べられるようになる。]
- 6 但し、例(12)のように形状的特徴から例外的に“上”との共起が可能となる場合もある。

- 7 三次元的特徴を持つ名詞について、例外的に“上”との共起が認められるものに、“火车”、“飞机”などの乗り物の例が挙げられる。保坂・郭(2000)、杉村(2001)、西楨(2004)などに詳しく述べられているように、これらの名詞は、閉鎖された空間を有する典型的な三次元的特徴を持つ名詞であるが、いずれも“里”のみではなく、“上”も用いられる。
- 8 このような認識は、英語の前置詞“in”、“on”の使い分けにおいてもみられる。
“In the grass suggests that the grass is long, on the grass that it is short.”
(Leech1969:162)
すなわち、前置詞“in”が用いられる場合、その草の長さは長く、反対に“on”が用いられる場合には短いことが示唆されるという。言い換えれば、このような前置詞の使い分けによって、草に対する認識の違いを反映させることが可能となる。
- 9 例文の下線は引用者による。

主要参考文献

- 杉村博文 2001. 「隙間の中?」『中国語』No.494 内山書店(56頁)
- 高橋弥守彦 1988. 「方位詞“上”と“里/中”について」『外国語学会誌』No.17 大東文化大学外国語学会
- 保坂律子・郭雲輝 2000. 「名詞を場所化する方位詞“~上”と“~里”」『中国語学』247号
- 儲泽祥 1997. 《现代汉语方所系统研究》华中师范大学出版社
- 崔希亮 2001. 《语言理解与认知》北京语言大学出版社
- 童盛强 2006. 也说方位词“上”的语义认知基础 《语言文字应用》
- 高橋弥守彦 1992. 是用“上”还是用“里” 《语言教学与研究》第2期
- 葛婷 2004. “X上”和“X里”的认知分析 《暨南大学华文学院学报》第1期
- 廖秋忠 1983. 现代汉语篇中空间和时间的参考点 《中国语文》第4期
- 廖秋忠 1989. 空间方位词和方位参考点 《中国语文》第1期
- 刘宁生 1994. 汉语怎样表达物体的空间关系 《中国语文》第3期
- 吕叔湘主编 1980. 《现代汉语八百词》商务印书馆
- 吕兆格・郭晓沛 2006. 方位词“里”的多角度考察 『現代中国語研究』第8期 朋友書店
- 齐沪扬 1998. 《现代汉语空间问题研究》学林出版社
- 沈家煊 1999. 《汉英对比语法论集》上海外语教育出版社
- 寺泽知美 2007. 关于现代汉语方位词的用法 - 以“上”和“里”为例 名古屋大学大学

院国际言语文化研究科硕士学位论文

西槇延子 2004. “里”和“上”的语义特征分布 『中国語學研究「開篇」』 vol.23

朱德熙 1982. 《语法讲义》商务印书馆

邹韶华 1984. 现代汉语方位词的语法功能 《中国语文》第3期

Herskovits, Annette. 1986. *Language and spatial cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.

Leech, G.N. 1969. *Toward a semantic description of English*. London: Longman.

Tyler, Andrea and Vyvyan Evans. 2003. *The Semantics of English Prepositions*. Cambridge: Cambridge University Press.